

仏となる道

——『教行信証』の諸問題（十七）——

金子大榮

—

今日は「仏ほとけとなる道」という題で、『教行信証』「証卷」のところを話します。「教行信証」という文字を見ますと、行と信と証とは教えによつてあらわされるものであることは言うまでもないことです。そして、その教えはいつたい何を我々に教えるのかといえ、それは法と義と道とであるということです。教法という言葉がありますから、教えは法を示すものである。その法にしたがっていくのが行ですから、したがつて「行卷」は教えによつて説きあらわされたる御法をあらわすものであると、こう言つていいであります。

教えは道理を説くものである。すなわちいわれを説く、そのいわれをあきからにするのが「信卷」である。それに対して「証卷」は道である。御法といわれと道という言葉によつて行信証をあらわすことができる。そうすれば「行卷」であらわそうとするものも、「信卷」であらわそうとするものも、別なことではないということがわかるでしょう。この道を法として説けば行である、いわれとしてあらわせば信である。道そのもの、道というものを、信心を獲

てあらわそうとするものは「証巻」であると言っているのでしょうか。ですから、今までも道と言えは此の世から浄土へ往く道であるということ、道という言葉をしばしば用いたのであります。これは道という名において法を語り、いわれをあらわしたのでありまして、道はそもそもどういう意味を持っているかを説くものが「証巻」であると、こう考えていいでしょう。

そういたしますとその道とはどんなことであるかをあらわすために、「証巻」はまずこう言っております。それは、
真実証を顕さば、すなわちこれ利他田満の妙位、無上涅槃の極果なり。すなわちこれ必至減度の願より出でたり。
また証大涅槃の願と名づくるなり。しかるに煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌、往相回向の心行を獲れば、即時
に大乘正定聚に入る。正定聚に住するがゆえに、必ず減度に至る。
〔聖典〕二八〇頁

とあります。必ず減度に至る。この道を往けば必ず減度に至る。減度すなわち仏です。減度という言葉は涅槃でありますが、いまは仏。その仏になる道は念仏を申し本願を信ずれば正定聚に住する。正定聚に住すれば必ず減度に至るという、そこに住正定聚ということと必至減度ということが説かれてあります。

正定聚と減度とは別なものである。しかしながら、住と必至とは一つのものであると、こう言っているのでしょうか。正定聚はこの世のことであり、減度はあの世のことであると、蓮如上人などはつきりと区別すべきものであると言っておられます。それはこの世において悟りを開くということはないのであると、言うことを言おうとする『歎異抄』も同じことあります。しかし、この世において与えられるものは正定聚で、必ず仏に成れるということであって、仏に成ったということではない。だから、必ず仏に成れるという境地になる。それが住であります。

その正定聚に住すれば必ず減度に至るのですから、そこで必至という。必至ということは同じことでしょうか、正定聚と減度とは二つのものであると、こう言っているのでしょうか。正定聚に住する、だから必ず減度に至る、と。住正定聚は現在の立場であり、必至減度はその現在の立場において、そして必ずそういう未来に期することができる。

入学すれば必ず卒業すると。入学したことが住正定聚でして、そして必至滅度はきつと卒業ができるということである。だから、住と必至とは一つであります。しかし、入学したということと卒業したということとは別であるということでありましょう。そこで、その住と必至ということなのですが、その滅度とは何であるかということ、滅度は常樂であり畢竟寂滅であると、こう説いて、それが終わると、

しかれば弥陀如来は如より来生して、報・応・化種種の身を示し現わしたまうなり

〔同右〕

という言葉が用いられてあります。これはどういうことであるかという、我々の往生を求めての到達点、私たちとしては証大涅槃とは到達点である。ところが、我々の到達点が如来の出発点である。私は我々を救うために、我らの境地へ出て来られた。

ですから一つの円のようなもので、仏道は直線ではない。円のようなものである。円のようなものですから往相で、往生浄土で必至滅度を目指して進んでいくのですが、その必至滅度して後戻りするのではなくて、ぐるっとまたこちらに回ってくるのですね、円ですから。そうするとその到達点こそ仏が我々を救おうとされるとされるころの出発点である。だから、その救いの徹底するところ、すなわち凡夫の世界である。仏が凡夫の世界に現われられるはたらきが、凡夫が仏になる道にそなわっておるのであるということをおうとしてあるのであります。

二

それでやがてその滅度からまたこの娑婆へ来ることは還相とも呼ばれております。だから、還相利他ということとは往相の道をずっと徹底するというと、また還相になるのであってということになる。そして、それは如来と相即をしているというものである。還相とは如来と相即をしているものであると言ってよいのでありましょう。そこで、往相、還相ということが「証卷」の重要な問題となっているのです。それを心して読みますと、始めの方においてすでに還

相のことが説いてあります。そういう点から申しますと、「還相回向と言うは」と、こうはしを改めて説かれたのは一体どういうわけなのだろうかということが問題になるわけです。

その前にもう一つ言っておかなければならないことは、その証大涅槃というこの大の字を付けた理由です。その大の字を付けたのは、この道は我一人が仏になる道でなくて、すべての人が仏になる。「同一念仏して別の道がない」ということであって、道とは自分だけの往く道でなくて、すべての人の道である。すべての道なるがゆえにそれが大道である。大涅槃とは我が往く道がやがてすべての人の往く道であるということであらなければならないということですね。

そして前の話に戻りましょう。「証卷」を読んでもみると、今申しましたように証のところにもな還相のことが言うてあるのですが、「しかるに還相回向と言うは」と、こうはしを改めて言うてあるのはどういうわけなのであるのか。はしを改めて言うてありますために、往相と還相とが何か二つのものになりまして、現に難しいことになって、実は私たちにとりましてもこの往相還相ということが甚だわかりにくのであります。しかし、「証卷」を読んでもみますと、往相回向の究極すなわち証大涅槃の徳として、そこに還相回向のことが、言葉が十分にあらわれておるのであります。それはまあ読んでもろうてもいいな。たとえば善導大師のお言葉を引いて、

西方寂靜無為の楽には、畢竟逍遙して、有無を離れたり。大悲、心に薫じて法界に遊ぶ。分身して物を利すること、等しくして殊なることなし。

〔聖典〕二八三頁

と、こういうふうです。さとの境地が自由自在に衆生を済度することができることであるという言葉があるのであります。

ですから、このようなことを一つ気がついたのですが、先に行申撰信ということを書きましたね。「ただ念仏」という中に信心がそなわっているのである。別に「信卷」というものを書かなくても「念仏成仏これ真宗」で、念仏と

信心という言葉が別になったからといって、法然上人は念仏為本、親鸞聖人は信心為本と何か別のように考えましたけれども、そうではない。念仏すればたすかるのであるというその信。そうなんですから念仏成仏に疑いがないということの他に信はないのであります。それにもかかわらず、「信巻」をなぜ書かれたかというところ、念仏すれば救われるのであるという信は、我々が「我が信念」とか、「我かく信ず」というものと違う。念仏すれば救われるという信はこういう意味を持つものでなくてはならないということで、念仏の信の意義、念仏を信ずるといふ、信の意義は一般にただ信ずる人もいるということと違う。一般に信ずるといふことはいかにも自力的な、自信という言葉もあつてですね、自信というものは特に力が入るのであるが、そうでない。念仏すれば救われるという信はそういうものではない。本願のおこころを疑わないということである。そこに信の重要さがあるというものでないであろうか。

さとりを開けば自由自在に衆生済度ができるということであるに違いがない。しかしながら自由自在に済度ができるということとは一体どんなことなのであろうか。大涅槃を証する、証するときに衆生済度ができるという。そのできかたとはどんなものであるかを、あきらかにするために還相回向を説かざるを得なかつたのであつて、すなわち還相回向を説くことによつて証大涅槃の意義をあきらかにするものであると言つていいのであろう。そう受け取ることによつて私たちが長い間苦しんだ往相回向、還相回向ということも解けてくるようになります。

今、『真宗聖典』を開いて、『往還回向文類』、それから『三経往生文類』、それを開いてみた。そうしますと『往還回向文類』には本願力の回向によつて往相、還相の回向がある。だから自利も利他も「わがはからいでない」と言つてあります。そうすると、往相は自利であり、還相は利他であると、こういうことでしょうか。そしてそれは「わがはからいにあらず」と言つています。『三経往生文類』の方には、往相還相の回向によつて真実の信を獲て正定聚に住するのだと言つてあります。だから正定聚に住するが故に必ず滅度に至ると申しましたが、その住正定聚に至ることが往相回向だけで正定聚に住することはできないわけです。二種の回向があつて、回向の上に二種の回向があるか

ら正定聚に住するのである。したがって滅度に至れば、それは言うまでもなくその涅槃と同時に自由に利他教化をするということも成り立つに違いない。このことは、大体、涅槃のさとりを得なければ、還相回向ができないのか、あるいは還相回向がそなわらなければ大涅槃をさとることができないのであるかということです。

三

和讃などの説き方を見ますと、

願土にいたればすみやかに 無上涅槃を証してぞ

すなわち大悲をおこすなり これを回向となづけたり

〔聖典〕四九一頁

あの回向は還相ですから、涅槃をさとらなければ利他教化はできないのだと言うと、還相回向は証大涅槃の後に来るものであると言っているのでしょうか。しかし、

無始流転の苦をすてて 無上涅槃を期すること

如来二種の回向の 恩徳まことに謝しがたし

〔聖典〕五〇四頁

と、こういうことになりますと、二種の回向がなければ無上涅槃を証することはできない。だから二種の回向があつて初めて無上涅槃を証することができるのである。こう言いますと、何か還相回向が正定聚の内にそなわつておらなければ無上涅槃を証することはできない、ということになります。

こういうことで、還相回向は証大涅槃の先にあるのか、あるいは証大涅槃の後にあるのかということである。そこでまた前後という言葉が邪魔になる、ならない。いや前だ後だということ、どうしても時間的に考えなければならぬのであろうか。それとも前とか後ということは、前とか後ということによって、その意味をあらわすものであると言つてよいのでないであらうか。必至滅度の願に対して還相回向の願というものがある。還相回向の願では、

正定聚に住するものは必ず滅度に至ることができる、しかしながら菩薩の願いがあつて、一生補処で仏にならないで自分はいつまでも菩薩でありたいという願いがあれば、それは可能なことである。そういう人は滅度に至らないで、すなわち仏のあとをとらないで、あくまでも菩薩として利他教化をするということであります。

そうしますと仏になる資格がある。資格があるけれども仏にならないで、そして利他教化をするということが還相であるというふうにも説いてあります。広島でその話をしておつたときにはみんな笑つていたのですけれども、たとえば、あの学校に入れば卒業すれば必ず学長になる資格がある。しかしわしは学長なんぞになるのは嫌だ。平教員で一生を送りたいというのであればそれも結構なのである、というようなものではないであらうか。それは願ひである。還相は一つの願ひであるということが、その意味において非常に意味の多いことでもあります。願う心は仏になつてしまふということも、仏になる資格があることはいいことであるけれども、しかし仏になつてしまふということは、何かその菩薩としての願ひではない。修行をした人の願ひではない。願ひとしてはあくまでも菩薩で送りたいということに還相回向の願ひというものが出ておるのであります。

それで思い出した。曾我先生は往相が仏道であり、還相は菩薩道であるということを言われた。これは割によい言いあらわし方であると思ひます。往相の仏道、還相の菩薩道ということである。しかし仏道といい菩薩道ということとは一体どういふことなのであらうか。その菩薩道には従因向果ということと従果向因ということがある。従因向果ということとは凡夫が修行して仏に成ることであります。修行とはどういふものであるかと未だ凡夫、未だ仏にあらざるものが修行して仏になる。これは従因向果という。有限より無限へということでしょうか。従果向因ということがある。従果向因とはすでに仏であるものが仏である位を棄てて菩薩の修行をするということ。それが従果向因ということでありませう。しかし、菩薩道とはどこまでも修行して仏になるということであるならば、おそらく仏になるということとは不可能であらう。

昔、修行は無用か、修行は無功かという問題にとらえられて、これは大変面白いことだと考えたことがあります。詳しいことは覚えていませんが、道元禪師というあの禅の大家がこの問題に苦しまれたということが、どこかに書いてありました。一体、我々が修行して仏になるということができるだろうか。無功なのではないだろうか。有限から無限への道なのでからね。有限はどのようにしても無限にはならないのです。もし仏が無限者であり、凡夫が有限者であるならば、有限者がいくら修行しても仏にはなれないのです。無限の道というものは修行すれば修行するほど、いよいよ遠いことを感ぜしめるものである。

江戸から京都へ来るのに五十三次というのがあってね。ここへ来ればもう京都は近いというのはそれは限りがある道であるからであります。もし道に限りがないならば、これだけ歩いたから近くなったということはないのであります。だからして、我々と仏との間は初めて仏になろうという菩薩の精神を起こしてから、仏になるのは五十三段あるというようなことを言いますけれどもね。しかし五十三段ということは確かに心境の変化としてそれは考えることができるでしょう。しかし五十三段から仏になる距離はいわゆる弥勒は一生補処でもう仏になれるのですが、その弥勒と仏との距離は無限である。だから弥勒になったということは仏の道にいよいよ遠いということではなくてはならない。仏になれないことを絶望するものは必ずしも初めて発心した人間だけではない。修行をすればするほどいよいよ遠いことを感ぜしめるものでなくてはならない。そうすれば座禅して修行しても仏になる望みはないのだから、修行というのは無功でないのでしょうか。いやそうではない。本来仏なのである。仏とは本来、衆生本地が仏なのである。その本来の仏が修行するのである。本来の仏がなぜ修行するのですか。本来仏なら修行は無用ではないか。本来仏であるといえれば修行は無用であるし、凡夫が仏になるというのならば修行は無功である。無用か無功かという問題に当面して道元は甚だ困ったということ。修行のうちにいよいよ遠しということもある。修行のうちに本来仏ということもある。

しかし従果向因である。果から因に向かうものであるという。それは因から果に向かう道は、やがて果から因に向かう道でなくてはならない。すなわち菩薩の道こそすなわち仏道である。仏とはどういうことを行ずる者であるかという、菩薩の道を行ずる者を仏というのである。仏道とはすなわち菩薩道である。菩薩道とは仏の心を学んでいくのである。菩薩道とはすなわち仏道である。しかしながら菩薩道としては、仏は目標であるに違いない。しかし、実際から言えば菩薩道とは仏道を行ずるものであり、仏道とは菩薩道を行ずるものである。

こういうことでいわゆる往相とは此の世より彼の世への道であるから、これは確かにさとりを開くところの道である。還相とは彼の世から此の世であるからそれは菩薩道である、と。往相の仏道、還相の菩薩道ということでしょうか。と言いましても従因向果か従果向因かというようなことは、ある点まではそういうことが言われても、たとえば、あの菩薩の修行が十地の修行ということがありますがね。その十地の修行の第八地以上の菩薩になりますと、菩薩道と言いながらすなわち仏道である。本来に菩薩道即仏道であるということをもつて体験するものは八地以上の菩薩であるというふうに説いてあります。八地以上ということも何かそこに階段があるようですけれども、修行がある点に行きますとそれがわかつてくる。それがわかつてくるということが菩薩道でしょうね。だから、還相回向として説いてありますことは、ことにいわゆる菩薩の五十二階位からいうと八地以上の菩薩の徳が還相回向に説いてあります。

四

こういうことですから、そうなりますとそこに我々が「証卷」を読む時に、真実証とはこういうものであるということにもう還相回向のことが十分に説いてあること。つまり「行卷」に信心のことが十分に説いてあるということと同じことである。しかし、それにも拘わらず、なぜ還相ということをやらなければならなかったかと言うと、そこ

に親鸞にとりましては還相利他ということが大きな問題であったということを考えなければならぬ。

確かにこの身の道である。往相ということがこの身の救われる道であるに違いない。しかし、この身の救われる道ということはやがてすべての人の救われる道でなくてはならない。「証巻」を見ますと、ここにこそ惹かれますものは「国土の名字仏事をなす」ということが書いてあります。安楽国土というお浄土の名前が仏の仕事をするのである。阿弥陀仏という何か仏様というようなものがあつてね、その仏様がいろいろなたらきをなさるのであると考えるのが普通なのでしょうが、そうではなくて安楽世界という名前が、お浄土という名前が大きなたらきをするのであるということです。

これは今までもしばしば言いましたように、仏があるから浄土でない、浄土があるところそこに仏があるのだと、こと分けましたけれども、しかし仏のはたらきは浄土のはたらきであり、国土。たとえば私たちの学校、大谷大学なら大谷大学という学校がある。そうすればその学校の名前がね、大谷大学はいい学校だということにならなければ意味はないのでしょうか。ところが金子みたいな人間がどれだけおつてもね、金子という名前だけ出たのでは、それは本物でないと、こう言ってもいいわけでありませう。たとえば京都の大学では昔は西田さんというような人がおつた、と。そういう人があるから京大という名前が出て来たのでしょうかけれども、しかしその人たちの名前が出て、そして学校の名前がでないようでは「未だその人の徳に至らず」と言わなければならない。その徳の至りは、そういう個人の名前ではなくて学校の名前がはたらく。学校というものがはたらく時にそこに意味があるわけでありませう。だから、浄土という名前の方が、そこがお浄土であるという名前の方が阿弥陀仏というもの以上にもっと本当のはたらきをなすということではなくてはならないということでありませう。

「国土の名字仏事をなす」ということを見ると私はいつもそれを感じせしめられるのであります。一人や二人優れた人間がいたからといって何の役にも立たない。その人の存在が、その人の存在よりはむしろその人のおる場所の名

前となるときに、それは何であるかというところ、それと同時に「同一念仏無別道故」ということが説かれてあります。自分が一人、往くところの道でない。道は万人のために開けたる道である。すべての人の往く道。あらゆる人がこの道を往く。その道を自分も往くのであるというところに往生浄土の意義がある。だから、喜んでその道を往こうということは、前に生まれる者も後に生まれる者もすべてこの道を往くのであるという、それが大道である。天下の大道である。

天下の大道であるから、四海同朋であり、同一念仏していくことでなくてはならないということですから、それが道ということであるならばその自利と、自利おのずから利他。自分の道はやがてすべての人の往く道であるというふうなものをもっておらなければならぬ。そうでなければ正定聚に住することもできないし、これすなわち往還、往相、還相の徳があつて信心がいただけ、そしてそこに滅度を証するということの意義があるのであります。こうして特にその還相回向と言つて説かれているものは何であるかということを見ていくとよいわけであります。

還相回向の還相の菩薩。還相の菩薩はやがて浄土の菩薩なのであります。その浄土の菩薩の徳として説かれてあるその還相行というものについて、いろいろの記述ということがあります。しかし、今ここで話してみたいことは無漏、無相、無作ということであり、菩薩の修行も八地以上になると無漏、無作、無相ということが説かれてあります。無漏といつたら純粹であるということであり、純粹であるということが本願の力ということでしょうね。そこに少しも自我が雜じておられない。虚仮の雜じておられない純粹行である。無作とは作無しですからね。無行為あるいは無功用とも言えましょう。だから意志をもちいない。まして作して作さずということが還相の菩薩の徳としてあるのである。

作して作さず。それは説明すれば我がないということでしょうね。私がしたのだということになれば、作して作さず、どうしてそういうことが行われたか、行った者も知らない、とにかくそういうふうになったのだという、作して

作さず、無作の行というものがある。そして無相の行というものがある。かたぢがない。無相、無作ということは一体どんなことなのであろう。私はかつて、それは空気をつくるというようなものではないか。その空気をつくるというようなことが先ほど申しました、個人の先生方の名前を言わず、学校の名前が出るということは、要するに空気をつくるというようなこと、それが還相利他の徳というものである。誰がやったというわけではない。どんなかたちであられたということはない。そのすがたも見えないし、どれがはたらいたということもない。確かに無作である。あるいは無功用、無相である。しかしながら、そこに空気がある。還相回向とは、還相の徳とは要するに往相の道を求めることによって残された、その空気である。空気をつくるということが一番大事なことなのでありましょう。

五

そこで阿修羅の琴ということが何か少しわかってきたような感じがするのであります。

他力と言うは、如来の本願力なり。

〔聖典〕一九三頁

本願力と言うは、大菩薩、法身の中において、常に三昧にましまして、種々の身、種々の神通、種々の説法を現じたまうことを示す。みな本願力より起こるをもつてなり。譬えば阿修羅の琴の鼓する者なしといえども、音曲自然なるがごとし。

〔聖典〕二九八頁

叩くものがなくて音がするという、これはどういうことかわからない。わからないけれども阿修羅の琴はどんなことであるのか。これはよくわかりません。とにかく阿修羅が琴を持っているのでしよう。

『観無量寿経』には、「鼓せざるに自^{おの}ずから鳴る」〔聖典〕一〇〇頁〕という言葉が浄土の第六観ですが、鼓せざらずから鳴るといふ言葉がある。打つ者はないけれども空中に虚空の中に何か鼓が現れて、空中に太鼓でも何でもいいですわ。でも叩くものがないけれどもおのずからなる。しかしそのおのずからなるということはどういうことで

あるか。それはおのずからなるのであるからして無茶苦茶かというところではない。聞く人によって、聞く耳によって聞こうと思うことができる。あるいはその人が耳をそばだてておれば、その空中にあらわれたところのその阿修羅の琴が音曲自然である。そして種々の身、種々の神通、種々の説法を示現して、それが説法の声とも聞こえ、あるいは種々の神通とも感じられるというものが「行巻」の終わりに出てますし、いまの「証巻」の終わりにも出ておることが、なるほどそういうことが還相ということなのであろう。

だからこれが還相だということを我々は考える必要がないのである。ただ一筋に往相の道を求めていけば、その本願力のゆえにそこに阿修羅の琴があつて、そこに鼓せずしておのずから鳴るものがあつて、そしてただ鳴っているのではない。耳をそばだてる者において、欲のある人には欲をゆるめる響きが聞こえ、腹を立てている人間の耳には腹立つ心をなだめるところの聲が聞こえるというものが還相なのであろう。だから還相ということは、どんなことであると我々が考えるということが、かえって無用なものであつたと、こうすらも言えるのではないであらうか。

それにも拘わらず、どうしてその還相ということを強調しなければならなかつたかといえは、宗祖にとりましては利他教化ということが、本当に自分の道は、ただある一人の道でなくて、すべての人の道であれかしという願いが深かつたのであるということでありましょう。だから還相の徳が浄土へ往かなければ還相の徳はあらわれないということが一筋に浄土を願うところの大きな理由になつたのであると、こう言つていいのでしょうか。大涅槃はどうして大涅槃と言ふことができるかということ言えば、それは還相の徳があるから大涅槃を証することができるのであると、こういうことでありましょう。

そこでもう一度戻りますが、往相の仏道はすなわち還相の菩薩道である。往相の仏道が還相の菩薩道としてあらわれるが故に、菩薩道は無限無窮である。無限無窮であるけれども、しかしながらいつまでたつても仏になれないといふことではなくして、無限無窮であることがそのまま仏の道として修められていくのであるということが「証巻」に

還相回向ということを説かれた理由なのではないであろうかと思えるのであります。

これで話は済んだのですがね。これは僕の感想なのですが、私は年来「ありがたい」ということに三つあるということをおもってますし、しばしば語って見たこともあります。そうして今この「証巻」を読みながらそれを思い出した。第一のありがたいさは死んでいけるということであります。人間が死んでいけるということは何の思い残すところもなく死んでいけるという、これが一つのありがたいことである。それが必至滅度ということですね。必ず滅度に至るというのは「臨終一念の夕、大般涅槃を超証す」るなり。生を尽してですね。生の意味が、一体、人間が死ぬということが生のさまたげになるものではないのでしょうか。死なねばならないということを考えれば、生きている張り合いがないなどということは、これは間違いであります。死ぬということがあつて初めて生の深さがわかる。ですから死が闇であるか、それとも死こそ生を照らすところの光となるか。死に光あれば生に喜びがあるということであろう。生を照らす光明が死を破る光明が生にいのちを与える。光明無量、寿命無量ということも、結局死んでいけるといふありがたさ。

それでお釈迦様の仏教もそうなのでしよう。「梵行すでに立ち、所作すでに成じ、また後の有を受けず」。もうこれで迷い出るといふことはないんだと、いつも申しますように、ながき迷いも今生限りであるといふ、その死んでいけるということが生の深い喜びとなる。深い喜びとなくってはならない。だから涅槃は虚無なりと、この間もある会で虚無の話をしたのです。虚無といふとニヒリズムといふようなもので何か嫌な感じがされるのですが、そうではない。虚無というのは、もう生の灯火がすっかり燃え尽して涅槃ということはそういうことですよ。命の灯火が燃え尽して何のあとも残らないであつたといふことは一生涯十分に生かしてもらつたといふ、そういう喜びでなくてはならない。

死んでいけるといふことが必至滅度である。さて、その必至滅度といふことは同一念仏しての道にある。すべての

人の往く道を私が往くのである。そうすれば、それが利他円満で、自分の救われる道がそのまま、また人びとの救われる道になるということは、そうすればいわゆる分を尽して用に立つということだ。だから、自分が救われていくことは自分の分でありますが、その分を尽すことがすべての人の救われる道を開いたことになるから、これは用に立つということである。用に立つことの有りがたさ。御用に立つことの有りがたさを今日、人間の復活とか、変なことが問題になっていますがね。用に立つことの有りがたさというものが大体感じられないからではないかと思えますね。みんな個人個人がもう孤立的になって、何か無目的にそういうものの用に立つということがない。だから、人間世界がありがたくないということでしょうが。

近頃、また余談になりますけれども坊さんは一体何をしているのだということ、確かに批評者の言う通りですね。批評者の言う通りですけれども、しかし、私は何か反対に考えています。今は仏教繁盛だと思っています。みんな一生懸命だからね。何をしておるかこう言われますけれども、お葬式も、本心に心からお葬式をつとめれば御用に立つのだからな。お経だけを読んでおつたって、何になるって言われますけれども、お経を読めばそれによって心をしずめるという、やはり死んだ人の命日にはお経を読んでもらいたいという要求がある。それに対して読むのだから御用に立つに違いない。何かの用に立つということが有り難いことである。

第三のありがたさは、これは伝統の流れに加わることと、こう言いあらわしておるのであります。これは一寸わかりにくいかもしれませんが。しかし親もこの道を往く。先祖もこの道を往く。そして昔から心ある人は皆この道を往く。ただ一筋の道があつて、その永遠の一つの道がある。その流れへ念仏することによって入ることができる。それがあるいは還相回向ということではないであろうか。還相回向の名において死んだ人を仏と拝むと。死んだ人は仏になるということが還相回向であるとしば説明されております。もしそういうことであるとすれば還相利他ということが、我々が還相の流れに身をおくことにならしめられたという、その第三のありがたさであると。こういただき

ますと、三つといえども結局一つなのであって、証大涅槃。その証大涅槃の道は万人がすべての人がすべてそこに帰するところの道である。そして、それが本当の精神生活の伝統の流れに自分の身を寄せることであるということでありましょうか。

こうしてこの一回で、時間の都合もあるので進めましたけれども、「証卷」一巻において顕すところが仏となる道であって、その仏となる道として真宗の教えを説かれたものである。ここで「行卷」において法を説き、「信卷」においていわれを説き、そして「証卷」においてことに道というものをあきらかにされたと見ておくことができるのであります。

（本稿は、一九七一年一〇月二一日、大谷大学における講義『教行信証』の諸問題』を筆録整理したものである。文責編集部）